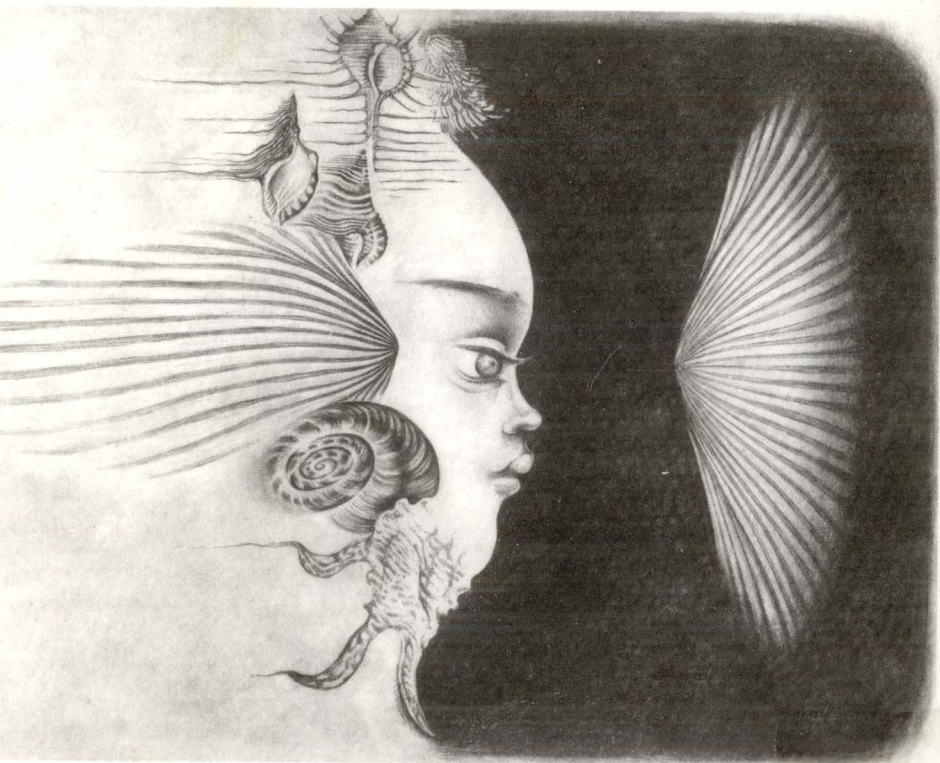


ヤップの島の物語

大内青琥



朝日新聞社

ヤップの島の物語

大内青琥

おおうち せいこ

昭和14年8月30日東京生まれ。幼児期より父の画家大内青坡に絵を学ぶ。義務教育だけで7回転校、長じて30余種の職業を遍歴。1979年以来南太平洋の島々を放浪中、約3年間にわたりヤップ・マープ島で帆走大カヌーの建造を記録。現在、同島に在住。

O'NUW S. OUCHI
P. O. Box 591, Colonia, YAP
F. S. Micronesia 96943

ヤップの島の物語

1985年9月20日 第1刷発行 定価1600円

著者 大内青琥

発行者 川口信行

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-545-0131(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 (東京) 0-1730

© Seiko Ouchi 1985

ISBN4-02-255398-7

Printed in Japan

儂^{はな}くも、なつかしい島マープ

太平洋のミクロネシアを放浪するうち、風来坊なりの妙な強みで酋長会議のためヤップ本島へ出て来ていたマープ島総酋長（当時）ガアヤンから彼の島へ招かれることになったきっかけは、私には願ってもない「光栄のゆきあたりばったり」とでも称すべきものだった。

「貴公ハ画工ナリヤ」

「ま、のようなものと心得ます」

「画工トハ、絵ヲカクモノデアルカ」

「さよう。絵もまあかけるが、恥の方がいささかもっとかけます」

「シツカリトカケルカ」

「それはもう、しっかりとかけます」

しからば、というものは、ずみで私は一九八〇年以来、太平洋地域最大にしておそらく最後になるであろう古帆船^{ムツ}（かつて太平洋島嶼^{とうしよ}文明のいわば大航海時代に全盛をきわめていた、大三角帆およ

びシングルアウトリガー付きの帆走カヌーの建造から進水儀式までの一部始終とそれに関わる島のようすを、二十数冊におよぶノートへぎっしり記録するという千載一遇の機会を得た。

私は自分でもよく分らないが、ただ無性になにか懐かしい帰巢本能のようなもの——遠いなつかしい呼び声に魅かれて「南」へ流れついただけであつたから、はじめはただ「ミナミノシマ」と「ヘンなよそ者」の關係にすぎなかつたといつていいだろう。島の方こそ、ゆきずりの風来坊が何しにやってきたのか、とさだめしウロンであつたにちがいない。

けれども次第に島の老人たちと戦争の話になれば「ナンヨグントウ」と「ナイチ」の間柄になつたり、若者たちと寄りあえば「開発途上」やら「先進」とやらの英語が顔をだす。ことにガアヤンとは、日記を繰ってみると「……痛飲し、両巨頭日や国交につき大いに談合す」などとおもえば、また別のページには「コノワカラズヤメ」と一言なぐり書きがある。私たちは互いに日本の軍歌もうたえばキリスト教にきらわれた島の古謡をきき、あるいはアメリカのヤシ酒と島のヤシ酒を呑みくらべ、古いヤップと新しい日本の女の話をし、そして一見およそ時代ばなれしては見えるが、その悠長、非能率などが存外「来るべき終末」とやらのためには思いがけぬワクチンになるかもしれないのんびりしたカヌー仕事などで暮らすうち、いつか知らぬまに抜きさしならぬといったカンケイになつていたらしい。

とうとう私は、島の男の象徴である「石貨^{ライイ}」を受け、オゴソカな「名付け^{ミトウン・ガトユオウル}の儀式」までして貰い、大酋長の息子という次第になつてしまった。

この、まだ日本にはほとんど紹介されたことのない南の島マープは赤道ちかく、カロリン群島ヤップ諸島にある。行政上はアメリカ信託統治下に含まれ、ミクロネシア連邦（略称FSM、大統領は日系のトシヲ・ナカヤマ氏）ヤップ州の一小島だ。

しかしそんなことは、おおかたはまるで人ごとのような住民がわずか五百人ほど、その多くは腰ミノ、ふんどし姿でヤシ葺き小屋に住み、たいまつでサング礁の魚を獲り芋をつくり、絶対的相互信頼をたてまえるとする財産制度と伝統的婚姻関係によって昔ながらの暮らしをささやかに守っている。いまだに貝や石のおかねが重要な役割をはたす。距離的にもグアムからさほど遠くないことなども考えあわせると奇跡的にみえるほど遺習伝統の破壊をまぬがれてきた小島のひとつである。

こんなにち今もって大きな影響力を失わない長老たちは、長いあいだかたくなにこの島への島民以外の接触を可能なかぎり拒んできた。観光客の流入はもちろん、石貨・貝宝などの文化遺産や、重要な二大生活必需品であるヘナウン^ン家^ンならびにヘムウ^ン帆走カヌー^ン建造などの知恵の或る部分——代々にわたり限られた口伝によってのみひっそりと伝えられてきた、彼らにとってお互いに誇るべき最も重要なデイトール——のみだりに流出することも、島の慣習^{カヌグム}から極力きらってきた。

しかし、彼ら住民がこれまで固守しつづけてきた島のやりかたにも容赦なく消費文化の波というやつはおしよせている。従来の生活必需の知恵のかずかずも次第に、急速に伝統工芸品とでも

いふべきものに変容しつつある。

そんな今、もし鬱蒼たるマングローブの繁みをぬけ島の奥深く分けいって、いちめん椰子の林におおわれたマープ島バチエルへ行ってみたら、圧倒されるかもしれない。

目の前に、忽然として、まず一九七八年より六年あまりをかけて建設された、奥行き百尺(約三十メートル)、高さ三十尺(約九メートル)という大ペバイル厳肅な大集会議場があらわれる。さらにもうひとつ、かつて建造されたことのない超大型セーリングカヌーが、ごく無造作にといたふうに置いてあるのだ。

古帆船は、全長約十二メートル(七ヒロ強)、人員換算五十人の積載が可能であり、世界最大級のシングルアウトリガー型帆走カヌーであるというだけでなく、実際に古来の外洋帆走法による太平洋航海に立派に適するように設計建造されている。

帆をいっぱい張った場合、全体の高さがビルのほぼ四階に達するこの大カヌーは、推定樹齢百年以上の島きつての巨木タマノの木(マホガニーの一種)を用い、一般にカヌー用材としてよく知られるパンの木では不可能な、これ以上の大きさになると人力ではカヌーの帆をかえすことができないというギリギリの寸法に挑んだものだ。

古くからの大集会議場は、そのほとんどが太平洋戦争当時に消失したが、このたびの再建では昔ながらの伝統的工法を出来るかぎり復元することが重んじられ、壮大なヤシ葺き屋根もさることながら、とりわけ注目すべきなのは巨大な柱と梁とをヤシ縄でこまかく飾り結びあわせている、

ヤップ独特のみごとな組み紐模様の技術だ。この緻密な至芸を伝えているものは、全島さがしてももう何人とは残っていない。大人ふたかかえ分もあるようなマホガニーの柱には巨大な黒トカゲがまきつき、高い大梁からは無数の木彫りの海鳥がいつせいに舞いおりようとしている。

島流の考えに従えば、彼をよろこんで父とみとめる四十人の子どもと、広さではなくよく実るパンやヤシの実ではかる豊かな土地をもつマーブ島の王様ガアヤンは、島内部の多くの反対を説得し、もつとも力づよくガアヤンの提唱に終始応えつづけた首長のひとりタマグヨロンの腕を借りて、これらをようやく完成させた。

古い考えの年寄りたちのこだわりもさることながら、まったく逆に、そんなことよりなぜホテルやビーチをつくらないかといった若い世代の反論もまたあったのも事実である。

ガアヤンの一貫した主張を強いて代弁すれば、「今こそはこの貴重な遺産が完全に失われるまえに、縦には続く世代へ永く、横には洋の東西へひろく、これを伝える努力をすべき時ではないか」とでもいったことになろうか。けれども、そんな能書きはまったく余計なお世話にもおもわれる。こつこつと歳月をかけてガアヤンは、さながら遺言状のように、このでっかい二つのものをこしらえた。

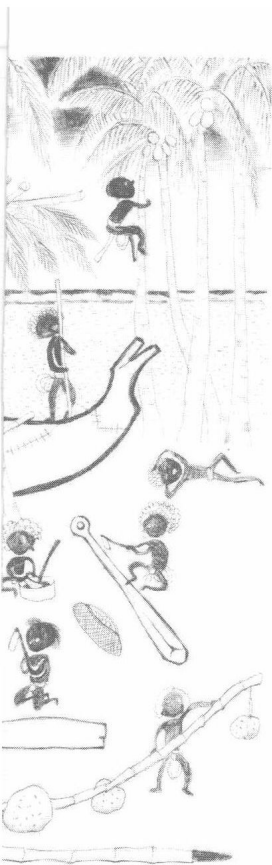
なんか、とてつもない現代の宝物はうぶつのような気がしないでもないし、しかしいったい、これがどういう意味をもってきてこれからどんな役に立つのか、正直いって、ほんとうのところは当のガアヤンにも分かってはいまい。ただ人知れぬ宝石のように、それらはほとんど密林に埋もれたま

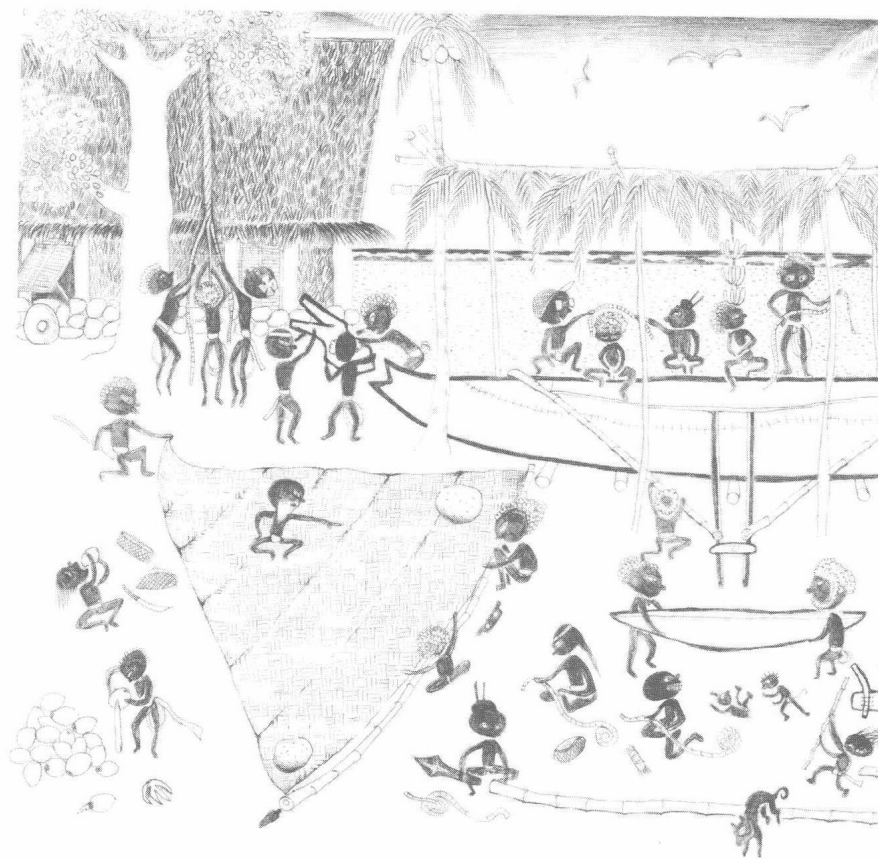
まである、といつていい。

私は、マーブ島でのかれこれ六年のあいだ酋長らの人柄と島のくらしに身ぢかく接し、むろんこの島が決して世間のうわさするようなトツテクワレル物騒な島ではさらさらなこと、否、むしろ皆やさしすぎるほど実はやさしいのだということ、彼らをかたくなにさせていたものは何だったのだというようなことなども、休むに似たる頭でほんの少しずつ考えてみた。そして無論なにも分かりはしないが、ただ私は懐かしい——はかな儂くも、なつかしい島——をひとつ知った。それだけで充分だ。

都会では吹きまどっているばかりの私なのに、遠めがねをさかさにのぞいたような世界の彼らは私に最高の栄誉である「石貨」^{ライ}を授けてくれ、おまえの好きなき、すきなところ、すきなだけ居ていいと認めてくれた。

ガアヤンによれば、島で正式にとりきめた石貨の儀式を受けたのは、外国人では私がはじめて





カヌー建造

だということだ。が、この石貨も、私はそのまま密林のあるがままのところへおいて、苔むし朽ちてゆけばいい、とそう思っている。

目次

儂くも、なつかしい島マーブ

I 星影の映る島

星をみている 14

一日一食 17

トビウオ漁のあつた夜 24

二そう目のカヌー 37

保存食をつくつてみる 46

星のような島 50

サンゴ礁で 51

火をつくる 56

今日はなにをすべきでないか 60

グルワンのくれた貝飾り 65

右向けエ左 71

丸木橋 81

女こどものつよい島 84



〈祭の朝〉 貝のおかねを先頭に男たちは海の幸、女、こどもは山の幸……

百樹の王	90
人喰い魚	97
カジキをひろった!	104
ライネンマデニワ イラレルカ	
迷い子	125
ちよつぴりコワイ話	127
闇	134
魚の悲鳴	136
悲母	143
ミクロネシア語入門	146
椰子酒	152
櫛	160
II ろうそくの灯で――	
えんぴつ	166
月夜の蟹	172
タピオカ	179



伝承幻談

185

190

195

199

204

209

21C

215

218

222

229

230

232

234

245



半神人ギルディブング

土の器・火・かまど

龍宮

竹取物語

あとがき

250 247

257

254 252

絵 装幀・地図

大内 熊谷 博人
青琥



I
星影の映る島



星をみている

二つ離れた部落から、夜の更けるのを待つて、潮の満ちた新月の海を竹の筏をこいでわがヤシ葺き小屋へ帰ってきた。

霧の粒がいちめん銀いろにひかったような低い雲が風にゆっくり流されてきて、暖かい雨をばらばらとサンゴ礁の内海へ落として通りすぎてゆく。

満天の星だ。その星空にまだ濃い霧のような銀の雲があるなあ、と思ってよく見るとその辺り、実に天の川の一部（！）とわかる。星座などほとんど見分けもつかない。星。ただきら星。

天のへりにそって、ゆっくりと回転してゆく星と星座。それらを頭に刻みこんで、カヌーの舳へ先と艫のV型飾りから方位を確かめながら、昔の航海者たちは島から島へ太平洋の荒波を越えていった。

闇の海から見上げていると、星ぼしはまるで隣町のごとくである。いちめんにまたたく光の標をたよりに、舟をこいでゆきさえすれば、すぐにもそこへとときそうにおもわれる。